

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 27 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520273

研究課題名(和文)十九世紀末英国におけるウィリアム・ブレイク研究と日本研究との相関関係の探究

研究課題名(英文) A Study of the Correlation between Blake Studies and Japonism in Late Nineteenth-Century Britain

研究代表者

佐藤 光 (Sato, Hikari)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：80296011

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀末から20世紀初頭の英国におけるウィリアム・ブレイク研究と日本に対する関心とが、文化現象として部分的に表裏一体の関係にあったことを実証した。第一に19世紀末から20世紀初頭にかけて、ブレイク研究を契機とする日英文化交流が存在したことを示した。第二にロセッティ兄弟のブレイク論と日本美術論がどちらも直観を鍵言葉としており、それまでのヨーロッパ美術の伝統に対する反逆という意味を持ったことを明らかにした。そして、第三にブレイク研究家としての柳宗悦と、日本研究者でありブレイク研究者であった詩人ローレンス・ビニョンが、比較文化研究の実践者であったことを示した。

研究成果の概要(英文)：This research project has illustrated that Blake studies and Japonism in late nineteenth and early twentieth-century Britain are correlated with each other and show themselves as two sides of the same coin, seen from the viewpoint of cultural phenomena. The conclusion is summarized in the following three points. First, Blake scholars in Japan exchanged their publications with those in Britain and that they formed an international network of Blake researches at that time. Secondly, this network is traced back to Rossetti brothers who highly evaluated Blake and Japanese prints as an art of intuition, a form of art which is directly repugnant to the tradition of European art. Thirdly, YANAGI Munyoshi and Laurence Binyon, two key figures in this network, knew each other as friends and discussed Blake and Japanese art in the context of comparative cultural studies.

研究分野：英文学

キーワード：英文学 比較文学 ウィリアム・ブレイク 柳宗悦

1. 研究開始当初の背景

ロセッティ兄弟の回顧録や書簡集を調査すると、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティとウィリアム・マイケル・ロセッティはほとんど同時期に、ブレイクと日本の美術工芸品に対して興味を持っていたことがわかる。現在ブレイク研究者の間で「ロセッティ稿本」として知られるブレイクのノートを、D. G. ロセッティが入手したのは1847年である。その後、アレクサンダー・ギルクリストの『ブレイク伝』執筆にロセッティ兄弟は協力し、1861年に『ブレイク伝』の完成を見ずにギルクリストが急逝した後は、D. G. ロセッティが原稿に加筆を行い、1863年に『ブレイク伝』二巻本が刊行された。第二巻に収録されたブレイクの詩と散文はD. G. ロセッティの編集によるものであり、一連の作業の実務はW. M. ロセッティが担った。1868年には、ロセッティ兄弟の親しい友人でもあったA. C. スウィンバーンによって『ウィリアム・ブレイク評論』が出版され、さらに1874年にW. M. ロセッティ編集の『ウィリアム・ブレイク詩集』が刊行された。この間、彼らは日本の美術工芸品の収集を熱心に行い、友人知人には、日本マニアとして知られていたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀末から20世紀初頭の英国におけるウィリアム・ブレイク研究と日本に対する関心とが、文化現象として部分的に表裏一体の関係にあったことを実証することにある。最終的に、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ブレイク研究を契機とする日英文化交流が存在したことを示し、その諸相を解明するとともに、ブレイク研究家としての柳宗悦と、日本研究者でありブレイク研究者であった詩人ローレンス・ビニョンを、比較文化研究の実践者として位置づける。

第一に、ロセッティ兄弟の日本理解とブレイク理解を、彼らのテキストを分析することによって浮き彫りにし、両者を連結する接点を明らかにする。また、スウィンバーンとシモンズがどの程度日本に興味を持っていたのか、あるいは、日本を含む「東洋」をどのように理解していたのか、という問題を彼らのブレイク論を精査することによって解明し、ブレイク研究に関わった初期の人々の中で、ブレイク理解と「東洋」理解が結合した可能性を探る。

第二に柳宗悦の美術論を分析する。柳宗悦による『ヱリアム・ブレイク』が刊行されるのは1914年のことであるが、それ以前に柳は既に美術批評家として『白樺』誌上で活動しており、所謂後期印象派、オーブリー・ビアズリー、ホイットスラーに関する論文を発表していた。柳が行った西欧絵画の理解とブレイク研究が、ロセッティ兄弟、スウィンバーン、シモンズらのブレイク論とどのような影

響関係にあるのかを考察する。

第三に、柳とローレンス・ビニョンの交流を明らかにする。柳の著書『ヱリアム・ブレイク』巻末に収録された参考文献一覧には、ローレンス・ビニョンが編集したブレイクの図版集が含まれている。ビニョンは大英博物館東洋部の学芸員として日本美術に関する著書を発表し、講演を行うとともに、ブレイクや英国水彩画の歴史について研究を行っていた。また、1929年にハーヴァード大学に招聘された柳は、アメリカへ向かう途中にロンドンに立ち寄り、ビニョンと会った。一方ビニョンは同じ年の秋に来日し、日本英文学会年次大会で講演を行い、東京帝国大学で英国美術史の講義を行った。期せずして、柳もビニョンも、外国文化を教室で教えるためには「比較」という方法が効果的である、という言葉を残している。ビニョンのブレイク理解と日本理解の実態を考察し、エドワード・サイードの「オリエンタリズム」とは異なる「東洋」理解のあり方と、それを可能にする比較文化の視点を、ビニョンがどのように獲得したのかを解明する。

3. 研究の方法

ロセッティ兄弟のブレイク論と日本美術論、スウィンバーンとシモンズのブレイク論を分析し、その特徴を明らかにする。

柳が『ヱリアム・ブレイク』刊行以前に発表した一連の美術評論である「オーブリー・ビアズリーに就て」、「宗教家としてのロダン」、「ルノアールと其の一派」、「革命の画家」、「アンリ・マティスに就て」を分析し、その特徴を明らかにする。ロセッティ兄弟、スウィンバーン、シモンズらのブレイク論及び日本文化論と、柳の美術論を付き合わせて、論理の組み立て方、概念の使用法、根拠として提示される事実に影響関係が見られないかどうかを確認する。とくに、柳の「直観」という用語と、W. M. ロセッティのブレイク論や日本文化論に頻出する「直観」と「本能」という用語との関係に注目する。

ビニョンの著作を簡単に確認した限り、彼はブレイク論の中では日本に言及し、日本美術論の中ではブレイクと英国の水彩画に言及しており、結果として、比較文化論的な叙述が随所に見られる。柳の『ヱリアム・ブレイク』巻末に掲載された参考文献一覧に含まれるビニョンの著作を出発点として、ビニョンのブレイク論と日本、中国、朝鮮美術論の論旨の特徴を明らかにする。即ち、同時代において「狂人」のレッテルを貼られていたブレイクと、文化的劣等国と見なされていた東アジアの美術工芸品を、ビニョンはどのような観点から高く評価し得たのか、という問いを設定して、この問いに対する回答を得べく作業を進める。

また、『柳宗悦全集』に収録された柳の書簡より、1929年にロンドンを訪れた柳がビニョンと会って話をした事実が確認できる。ビ

ニョンの側に柳に関する記述が残っていないかを調べるために、大英図書館に管理が委託されているローレンス・ピニョンの未刊行の書簡、日記、原稿を調査する。

4. 研究成果

(1) ロセッティ兄弟のブレイク論と日本美術論

ロセッティ兄弟を含むラファエル前派の若者たちは王立美術院の芸術教育の方針に反抗し、我が道を行くことを選んだ。我が道を行くためには、既存の権威に背を向ける必要があった。そのための拠りどころは自分たちの「眼と心」だった。しかし「眼と心」を拠りどころとして選んだだけでは不十分であり、「眼と心」に既存の権威に対抗できるだけの力を付与しなければならなかった。そこで彼らは芸術教育において規範として教えられてきた作法を、芸術家と芸術家が描こうとする対象との間に介在する二義的な存在とみなし、「自分たちの心と手」によって「直接自然を研究すること」を理想的な制作態度とした。

このような彼らの態度は、およそ百年前に王立美術院の芸術教育に対して同じように反旗を翻し、「幻視」に基づく詩と絵画を制作したブレイクの姿勢と一致する。W. M. ロセッティはブレイクの宗教と芸術が一体化した活動を、より世俗的な言葉に翻訳して「直観」の芸術という表現を用いた。それを「幻視」と呼ぼうと、啓示、靈感、「直観」という言葉で表そうと、既存の画風や技法を意に介することなく、自らが信じるままに創作を行うという点では違いはなかった。そのような意味で「直観」とは、権威や規範を飛び越えるための踏み切り板の役割を果たした。英国美術に革命を起こそうとしたロセッティ兄弟にとって、ブレイクは王立美術院に抵抗した頼もしい反逆者だった。だから、彼らはブレイクを「直観」の芸術家として高く評価した。

ロセッティ兄弟が日本美術に寄せた関心も同じように説明することができる。彼らにとって重要だったのは、自分たちの芸術観に呼応する芸術が英国画壇とは無関係の場所で花開いていたという事実であり、それは王立美術院の権威と教育方針を批判的に見直すための足場となった。ヨーロッパ絵画の伝統から遠く離れたところに位置する日本美術に、自分たちが目指す方向と合致する絵画表現がある以上、ラファエル以降に確立された芸術観を絶対視しなければならない理由は消失する。このように考えた時、王立美術院の画風と技法は、彼らにとって、芸術表現の対象である自然と芸術家との間に介在する人為的な規則の総体と化した。これはブレイクが教会を神と人との間に介在する障害と位置付けて、糾弾した構造と同一である。ブレイクにとって教会が神と人との遮断する人為的な制度であったように、ロセッティ

兄弟にとって王立美術院は自然と芸術家とを分断する人為的な制度だった。この人為的な障害を取り払うためには、ブレイクが神と人との直接の交流を説いたように、芸術家が直接自然に触れ、自分たちの「自由な眼と心」で研究し、その結果を「自分たちの心と手」で表現する環境を整える必要があった。ヨーロッパ絵画の伝統の外部にあると想定された日本美術は、「直接自然を研究すること」を具現化した格好の存在だった。ブレイクと日本の木版画を説明するために彼らが用いた「直観」や「本能」という概念は、かつては神という言葉で語られ、後には意志によって制御され得ない無意識の領域で作用するとされた超越的な力と結び付くことによって、人為的に構築された制度と伝統を相対化する効果を持った。ロセッティ兄弟にとって、「直観」や「本能」の芸術とみなされるブレイクと日本美術は、新しい地平を切り開くための起爆剤として機能した。

(2) 初期柳の美術評論

柳の初期美術評論では、旧套と革新という対抗図式に則って「革命の精神」が強調された。「ルノアールと其の一派」を用意した1911年当時の柳は、「教示」という行為に芸術の発展を阻害する働きを見出していた。柳によれば、「革命の精神」とは、「教示」に従うことを拒否し、「自然なる本能」に導かれるままに創作を行う精神である。『白樺』2巻9号(1911)に発表した「オーブレー・ピアズレに就て」においても、「ルノアールと其の一派」と同じように美術批評の体裁を取りながら、芸術とは個性の表出であるという芸術観を柳は熱く語り、「習俗的方法」を「個性の要求」によって打破する時、革新的な芸術が誕生すると論じた。「革命の画家」(1912)でも同様であり、少し意地悪な言い方をすれば、「歴史の発展とは古きを破る新しき力の反復である」という柳の芸術観を例証する事例の一つとして、ルノワールやピアズリーに続いてポスト印象派が柳のアンテナに捕捉されたということになる。人為や作為は個人が制御できる意識の領域に存在し、利己心と結び付くがゆえに神の顕現とは程遠いところにあるが、没我の状態で見み出される芸術は、個人が制御できない無意識の領域から流れ出したものであり、したがってそこには「直観」と啓示を通して作用する神の働きが秘められている。柳は神の顕現と人の精神活動と芸術的創造行為に関して、総合的な理解を組み立てた。柳によれば、芸術とは芸術家の個性の発露であり、個性を表現するためには既存の芸術に反逆する必要がある、この文脈で直感や本能を重視したシモンズとロセッティのブレイク論は柳の著書『キリアム・ブレイク』に大きな影響を与えた。

柳は『キリアム・ブレイク』で「反抗は自然の意志である」と言い切った。柳の芸術観に従えば、個人の意志が強く反映される意識

の領域が「人為的文明」や「習俗的形式」と関連があるのに対し、意志によって制御できない無意識の領域が靈感と啓示を受信する場であった。「自然」とは後者の領域に働く力を指し、「天才」とは後者の領域が活発に活動する存在である。したがって、「天才」こそが「自然の意志」であり、「神の意志」である。それは「人為的文明」や「習俗的形式」を拒否するという意味で、「反抗」という形で出現する。「反抗」や「反逆」を「天才」の特徴として讃美する柳の議論は、当然のように画一化や固定化に対する攻撃へと向かう。「反抗」、「謀反」、「反逆」、「革命」、「抵抗」、「多く抗して少く従へよ」と激しい言葉が数多く並べられた。別の箇所には「子が親に対する反逆」、「子弟がその師に対する反抗」という表現が見られ、その後「服従は停滞を意味し、謹慎は萎縮を意味する」と続く。柳が重要な参考書と位置付けたスウィンバーンやシモンズのブレイク論でも、ブレイクが生きた時代やブレイク神話の構造を説明するために「反抗」(revolt)や「反逆者」(rebel)という表現が用いられているが、柳の論調はブレイクの作品論や詩人論という範囲を通り越して、一般化された革命論の響きがある。

大逆事件以後に柳が発表した論考や随想の内容と、未発表原稿「墳水」で柳が幸徳秋水の死を「不幸」と位置付けたことを総合的に考えるならば、柳は1911年に発表した「ルノアールと其の一派」や「オーブレイ・ピアーズに就て」から、1912年の「革命の画家」を経て、1914年の『ウィリアム・ブレイク』に至るまで、「反抗」と「革命」が歴史にもたらす積極的意義を美術評論であることを隠れ蓑にしながら論じ続けたと言える。

(3) ローレンス・ピニオンと柳宗悦

ローレンス・ピニオンが自らの日本美術論で列挙した参考文献と日本人協力者の氏名から、ピニオンが日本美術論を書き上げたおおまかな過程を推測することができた。しかし、注目したいのは、異文化である日本美術を英語圏の読者に少しでもわかりやすく紹介するために、英国文化と比較するという手法をピニオンが用いたことである。曾我篤白にウィリアム・ブレイクを引き付けたように、ピニオンは在原業平をバイロンになぞらえた。壮大な画風と弟子の多さに着目して、狩野永徳とルーベンスを比較した。浮世絵を説明するために、日常生活を題材にしたヨーロッパの風俗画をとりあげた。また、ホイットラーの「バタシー橋」に、広重のモチーフと構図の影響が見られることも指摘した。その上でピニオンは、「極東」の芸術に見られる特徴は、自然を模倣することではなく、自然に宿る生命を主観に基づいて描くことであると論じた。さらにピニオンは、第二の特徴として風景の重視を挙げる。ピニオンによると、人物像を中心に画面が構成されがちなヨ

ーロッパ美術に比べて、日本や中国の絵画は人を風景の一部として扱うことが多い。ピニオンは、ヨーロッパの絵画では人物像を画面の前面に押し出して、それらの人物の姿勢や表情に託してその絵の主題が描き出されるが、中国や日本の絵画では主題はほのめかされるにとどまっており、画面に暗示された手掛かりをもとに絵全体を解釈する作業は観者に委ねられると論じた。ピニオンは人と自然との関係に注目し、人を自然の征服者と位置付けるのではなく、「東洋」の風景画に見られるように、人を自然の一部と見る視点の重要性を説き、そのような視点を持ち合わせた英国の詩人としてワーズワスやキーツを挙げた。ピニオンは1929年に来日し、これらの内容を東京帝国大学の講義で語った。

同じ1929年にハーヴァード大学から講義を委嘱された柳は、訪米途中にロンドンに立ち寄り、ピニオン宅を訪問した。二人がどのような会話をしたかについては記録がないが、ハーヴァード大学で柳が用いた教授方法も、ピニオンと同様に、比較文化の視点に立脚するものだった。一つの文化を別の文化圏に紹介しようとする時、類似点と相違点を際立たせ、類似点については親近感を育むための手掛かりとし、相違点については価値判断を控えながら、その相違点の長所と短所を考察し、異文化間における相互補完の可能性へと話を開いていく。二人が講義に採用した議論の組み立て方は、優越感や劣等感とは無縁なところで異文化理解を達成するためには、極めて具体的、且つ実践的な方法だった。柳とピニオンが共にブレイクに共感し、ブレイクから多くの叢智を引き出したというところに、二人にとっての異文化理解の基盤があった。多様な個性を尊重することの重要性を説いたブレイクの言葉が、柳とピニオンによって実践されたと言える。

ここに記した研究成果概要は、「5. 主な発表論文等」の「図書」に記載した佐藤光『柳宗悦とウィリアム・ブレイク 環流する「肯定の思想」』(東京大学出版会、2015)の内容に基づく。詳細については、同書第4章、第6章、第13章を参照されたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

佐藤光、大正期におけるウィリアム・ブレイク受容と社会主義思想 井上増吉、白田宗治、白鳥省吾、比較文学研究、100号、2015、印刷中、査読無

佐藤光、ローレンス・ピニオンと柳宗悦 ブレイク研究者による比較文化研究、超域文化科学紀要、19号、2014、5-26、査読無

佐藤光、1900年代のブレイク愛好家の系譜 バーナード・リーチ、オーガスタス・ジョン、ジョン・サンブソン、超域文化科学

紀要、18号、2013、33-53、査読無

佐藤光、柳宗悦に於ける「テムペラメント」 『ウィリアム・ブレイク』(一九一四)の基底音、比較文学、55巻、2013、22-35、査読有

〔学会発表〕(計 1 件)

佐藤光、柳宗悦 『ウィリアム・ブレイク』革命の精神と個性の尊重、イギリス・ロマン派学会第38回全国大会シンポジウム「明治・大正期のイギリス・ロマン派 受容と変容」、熊本大学(熊本県・熊本市)、2012年10月20-21日

〔図書〕(計 1 件)

佐藤光、東京大学出版会、柳宗悦とウィリアム・ブレイク 環流する「肯定の思想」、2015、656

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 光 (Sato, Hikari)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：80296011

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：